大切な人の紡ぐ未来へ

瑠璃色の堕天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大切な人の紡ぐ未来へ

【Ｎコード】
Ｎ４３７０Ｊ

【作者名】
瑠璃色の堕天使

【あらすじ】
短編五弾目。
基本的な流れはあまり変わらず。

「・・・・・・という事なんですよ！それでですね、この人が・・・・
って、祐一さん、私の話を聞いてます？」

「ああ、聞いてる」

不振げな態度の栞に、俺は慌てて相づちをうつ。

・・・・・・・・・約一時間・・・・・・・・・・・・・

一つのパンフレットを片手に延々と俺に語りつづける栞。

はじめは時折あいづちをうって聞いてたが、

さすがに一時間を超えると聞くも疲れてきたので、

俺は適当に話を聞き流していたのだ。

しかしさすがにそこは栞、しっかりと不振に思ったようだ。

「本当ですか？・・・・・・まあ、いいです。

それでですね♪この主演の男優さんなんですけど、この人が・・・・・」

ま、まだ続くのか！？

俺はもうげんなりとしていたが、栞は輝くばかりの笑顔で

「ここが見所」だとか「この人は昔・・・」など話に熱を入れている。

それにしても・・・・・・

俺は目の前に並ぶ行列に視線を向ける。

そんなにいいストーリーなのだろうか、この「映画」は・・・・？

俺は前もって栞が買ったという映画雑誌をぺらぺらとめくってみる。

この雑誌に、今日栞と見る予定の「映画」の紹介が出ているのだ。

この雑誌によると、この映画は恋愛ストーリーのようで、

内容は「種族を超えた愛」がテーマになっているようだ。

見所はラストシーンのようで、

「映画を見た人の感想欄」をみると、涙が出たという感想が多い。

おかげでこの映画はいま、若者の間で人気が高く、
観客数も百万人を突破したそうだ。
そして、この映画の事を栞は以前から会話の中で出していたので、
名雪や秋子さんに頼んで、ようやくチケットを二枚手に入れ、
栞に、行かないか？と誘ってみると感激され、
思いっきり抱きつかれたという恥ずかしいエピソードがある。
それで休日に栞とこの映画館に来てみると、
この行列に巻き込まれたというわけである。
まあチケットがあるからちゃんとはいられるが・・・・・
「・・・・というストーリーなんですよ！」
「おお、それはすごいストーリーだな！」
あまりよく聞いてなかったが、俺は適当にあいづちをいれた。
「・・・・・祐一さん、聞いてました？私の話」
や、やばい・・・・・かなり疑っているぞ・・・・・
「もちろんしっかりと聞いてたぞ！」

「では、私がさっき話したストーリーの内容を説明してみて下さい」

「うぐぅ・・・・・」

「あゆさんの真似をしてもだめです」

栞は細い眉をひそませて、こちらをじーと見ている。

な、なんだ、その疑いの目は！？

俺がそんなに信用できないのか、栞！！

「信用できません」

「・・・・・何で考えている事が分かる？」

「もう長い付き合いですし、祐一さんは顔に出るのですぐ分かります」

う・・・・あゆといい・・・・少し気をつけねば・・・・・

「それよりさっき私、どういうストーリーかを聞きましたが？」

話を本筋に戻して、栞は再び俺に問い掛ける。

俺は覚悟を決めて話すことにした。

「恋愛ストーリーだろ？」

「それは分かっている事です。先ほど私が話した内容を言ってみて

下さい」

「わかった・・・・・・・・・

昔々あるところにおじいさんとおばあさんがいました。

おじいさんは山へ芝刈りに、

おばあさんは川へ洗濯に行きました。

そしておばあさんが洗濯をしていたところ、

川の上流からなんとおじいさんが流れてきました。

おばあさんはおじいさんに問いかけます。

『おじいさんや。どうして上流から流れてきたんだい？』

するとおじいさんは川から上がってこう言いました。

『それはな・・・・・』

・・・・ていうストーリーだろ？」

「全然違います！しかもなんですか、その変な内容は！」

どうやら栞にはお気に召さなかったようだ。

「だから、この映画の内容」

「・・・・・結局私の話を聞いてなかったんですね、祐一さん・・・・」

げ、ばれたか！？・・・・・・て、あたり前か。

栞は俺を睨みながら、頬を膨らませていた。

「そんな人、嫌いです！」

「悪かった悪かった、今度からちゃんと聞くからさ」

「誠意がこもってません！」

・・・・どうやら相当怒らせてしまったようだ。

栞はその後、つんっとしたまま前を向いて並んでいた。

俺には少しも視線を向けずに・・・・・・

このままの雰囲気ではせっかくの休日のデートも駄目になるので、

俺は栞の機嫌を直すために、とっておきの切り札を出した。

「栞、あそこの売店で何か買おうと思うんだが、栞は何がいい？何でもおごってやるぞ」

「本当ですか！？それではソフトクリームを・・・・・あ！？」

ようやくさっきまで怒っていた事を思い出したんだろう。

栞は顔を真っ赤にして口を押さえた。

ふ・・・・・・かかったな、栞。

ここの映画館の前の売店のソフトクリームがかなりの評判である事を知らない俺だと思ったか！！

「うう・・・・・何笑ってるんですか、祐一さん・・・・・」

「いや、そういう顔をしている栞も可愛いなって思ってな」

「か、からかわないでください！！」

顔を真っ赤にして、栞は俺にぶんぶん手を振る。

本当はからかったのではなく、本当にそう思って言ったのだが、

この事は栞には秘密である。

「まあそれはともかく、ソフトクリームだな。

さっきの件のお詫びにちゃんとおごるよ」

「それなら許してあげます」

そういって栞はいつもの笑顔をむけてくれた。

ふう～・・・・俺もこれから少し気を付けよう。

「じゃあ買ってくるぜ。あの店のソフトクリーム、評判いいらしいからな」

「あ、祐一さん、物知りですね」

「はっはっは、まかせなさい」

実は名雪や香里からすすめられたとは言えない・・・・・

死んでも言えない・・・・

それにしても、さすがは香里だな。

栞の好物や喜ぶような事は何でも知ってるとは。

「祐一さん、早く買わないと映画の開演時間になりますよ！」

考え事をしている俺に、栞は急かした。

「おっと、じゃあもし始まったら席、ちゃんととっといてくれよ」

俺は栞に席の確保を任せて、一旦列を抜け出そうとすると、

「あ、祐一さん、最後に一つ聞かせて下さい」

俺の服の袖を引っ張って、俺を止める栞。

「なんだ、まだ何かあるのか？」

そろそろ買いに行かないと時間が来てしまうのだが・・・・・・

俺が問い返すと、栞は真面目な顔で、

「おじいさんはなぜ川を流れてきたんですか？」

実は気にしてたのか、栞！？

俺は呆れて、しばらく二の句を継げられなかった・・・・・・・・・

「やっと中に入れましたね」

「ああ、それに結構見やすい位置だしな」

いろいろと入る際にもてんやわんやあったが、ようやく俺と栞は無事にいい席に座る事ができた。

「中央のこの席が一番見やすいですよね」

「まあな、目が疲れないし、一番いい角度だからな」

よく映画を見るときにやたらと前に座ってみようとする人がいる。確かにいい映画をよく見たいという気持ちは分からなくもないが、俺的に言わせてもらうと、前はかなり見づらいと思う。さらに目にも負担がかかるし、結構疲れやすくなるのだ。

「何かどきどきしますよね、この始まる前の緊張感」

「楽しみにしていたら余計に、な」

栞は気分が高揚しているのか、頬が少し赤い。

俺は横からそんな栞をちらっと見て言った。

「栞は本当にこんな映画やドラマが好きなんだな」

「そうですね・・・・・病気が治ってからもずっと見てますよ」

最近、学校の昼休み、栞とはほとんど毎日一緒にいるが、

話題の中で、よく栞は最近の映画やドラマの話をする。
そしていつも栞は楽しそうにそんな話をするので、
最近は俺もその影響を受けてか、家でもよくテレビを見るようになった。

「でも最近のドラマって、何かこう不幸な結末が多くないか？
死にそうになったりとか、後味が悪い終わり方とかさ・・・・」

まあ主人公やヒロインが死ぬことによって、
確かにストーリー自体の重みは増すのだが、
俺自身はどうも好きになれない。

「・・・・そうですね・・・・私もそういうのはいやです」

「・・・・やっぱり栞も駄目か・・・・」

「はい・・・・・・・・
やっぱり物語くらいはハッピーエンドで終わって欲しいです。
現実はうまくいかない場合がたくさんありますから・・・・・」

栞は俯いて、儚げな顔をする。
どこか栞の存在そのものが薄れていくような錯覚に陥り、
俺は自分でも意識せず、自然にそっと栞の頭に手を置いた。

「ゆ、祐一さん・・・・・」

栞もそうされるとは思ってはいなかったらしく、少し頬を赤らめた。

「現実は確かにうまくいかない場合が多いよな・・・・・・

でも・・・・・きちんと頑張って、前を歩いているやつには、

たとえ途中が辛い道であっても、

最後にはハッピーエンドが待っていると思うぜ」

俺は心からそう思っている。

栞という少女に出会って・・・・・・・

・・・・・・いろいろな苦しい事を乗り越えて・・・・・・・

・・・・・・・・そして、栞は今現実を歩いている・・・・・・・

それもまた積み重ねであり、その上に『奇跡』が起こった。

幸せになる人間は選ばれるんじゃない。

自らの手で掴むものだ。

それが・・・・・栞から教わった事だ・・・・

「そうですね・・・・・ありがとうございます、祐一さん！」

笑顔で礼を言われ、俺も照れくさくなり頬を掻いた。

栞はそんな俺をくすくす笑いながら見ていたが、

「あー！私、ポップコーンを買うを忘れてました！！」

「ポップコーン？さっきソフトクリーム、食べたばかりだろ？あんまり食べると太るぞ」

俺は呆れて栞にそう言ったが、

「何をいってるんですか！映画館といったら、ポップコーンですよ！」

妙に自信満々で、栞はそう言いきった。

そ、そんなものなんだろうか・・・・・？

俺は栞の迫力に押され、かくかくと頷いた。

「私、買ってきますね。よかったら祐一さんの分も買いますよ」

「い、いや、俺は腹がへってないから・・・・・・」

ソフトクリームを一本食べた後のポップコーンは辛いものがある。

俺は栞の好意を慎んで遠慮することにした。

「それじゃあ私、買ってきますね」

ふんふん～♪、と鼻歌を口ずさんで、栞は売店のほうを歩いていった。

そんな栞の後ろ姿はどこか浮き足立っている・・・・・・・

「ま、いいかな、こういうのも・・・・・・・」

・・・・・先が分からない人生という『ストーリー』・・・・・・・・・・

そんな中を、俺と栞は歩いていく。

俺はこれから始まるそんな日々に、そして未来に心が充実するのを感じた。

「ま、今日は映画を楽しむか！」

・・・・もうすぐ『映画』は始まろうとしていた・・・・・

<終>

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4370j/

大切な人の紡ぐ未来へ

2010年10月28日00時59分発行